

第9回美術クラブ例会「絹谷幸二 平和へ」展

連休初日の4月26日(土)、第9回美術クラブ例会を、梅田スカイビル タワーウエスト27階の「絹谷幸二天空美術館」で行ないました。ナビゲーター役は、同美術館顧問の南城守さん。会員12名、一般1名の計13名が参加。三野会長の開会挨拶の後、南城さんから天空美術館の概要を案内いただき、美術館に入場。絹谷作品を立体的に演出した3D映像を見た後、各自展覧会を鑑賞しました。その後、22階の「梅田スカイビル会議室」で意見交換会を行ないました。参加メンバーからは、「3D映像で、龍に食べられるという貴重な体験をした」、「万博にきたような体験だった」、「パワーやエネルギーを感じる」などいろんな意見があり、南城さんからは、「大人から子どもまで理屈抜きに楽しめる美のテーマパークにしよう」とこの美術館を作った。絹谷氏はみんながニューヨークの現代美術に眼を向けていた時代に、イタリアの古典壁画の研鑽をし、模写に励んだ。アカデミズムも経験し基礎を知っているが、それを感じさせないところに絹谷作品の深さがある」と説明がありました。絹谷幸二作品は、これまであまり知りませんでしたが、今回じっくりと鑑賞する機会を与えていただき、貴重な体験ができました。いちばん印象的なのは、爆発するような色彩感覚で、それがザラザラしたような質感を伴って迫ってくるところです。とくに絵画から飛び出したような立体的な作品にその魅力があり、3D映像に作品化したのはすばらしいアイデアだったと思います。私のお気に入り、詩を感じさせる静謐な「日月天馬飛翔」、キッチュな「朝陽富嶽玉取り龍不二法門」、ピカソの「ゲルニカ」を思わせる「ニューヨークの天使」など。今回は南城さんの特別の計らいで全員招待していただきました。感謝。(杉谷健治)

うめきとも叫びともつかぬ文字の配された絵画、ビルに絡みつきながら飛翔する立体の竜、極め付きは3D映像から溢れ出す菩薩や宇宙空間…それら全てに圧倒されながら、いつしか平和や愛というテーマがズシリと心に響く。素朴にして巧み、大らかにして繊細、クラシックでありシュール…若い頃よりその才能を開花させ、西洋美術の古典も習得した絹谷幸二だからこそその魅力、いえ魔力を一言や二言で伝えることは適わないのかもしれない。しかし、彼の作品に触れれば、その魔力の虜になる人は少なくないでしょう。今進化し続けている大阪梅田、そのスカイビルの上階、まさしく天空で出会える現代アートの世界。まだ体験していない方は、是非!!(中辻純子)

絹谷さんの作品を見るのは初めてで、キッチュなオブジェは迫力満点でしたが、イタリアのフレスコ画の手法で描いた色鮮やかな絵の中でも、とりわけ《日月天馬飛翔》(図1)の空の「青」に魅了されました。この澄んだ「青」は、以前、パドヴァのスクロヴェーニ礼拝堂で見たジョットのフレスコ画の「青」を思い起こさせます。礼拝堂には、壁一面に「キリストの生涯」などが描かれていて、その一つ《ヨアキムの夢》(図2)の背景の「青」がまさに、ジョットに典型的な「青」です。天使が空から舞い降りてくる様子は、絹谷さんの絵の天馬が空に飛翔していくのと対照的な感じがしました。また、源氏と平氏の戦いを描いた《平治物語絵巻》(図3)における紅蓮の炎の「赤」は、ジョットの《最後の審判》における地獄(図4)の「赤」に重なる気がしました。絹谷さんは、西洋の技法を取り入れながら日本独自の文化を描き、西洋と東洋を融合した画家という印象を受けました。(村田京子)(右上から:図1、図2、図3、図4)

これまでフランスの近代絵画を鑑賞してきた「美術クラブ」は、今回初めて、日本の「現代絵画」、文字通りのコンテンポラリー(同時代)アートに親しむことになりました。私自身としては2度目の「天空美術館」体験でしたが、今回も、古代やルネサンスの壁画からピカソやデ・キリコ、さらには仏教美術、富士山からスカイビルそのものまで、すべてを食欲に飲み込み消化してしまう画家の強靱な胃袋が生み出した、宇宙的なエネルギーに満ちた絵画群に強い印象を受けました。昨年、京都の美術館で見た村上隆のアニメポップな世界とは異なり、もっと重量感がありながら、それでもやはり混沌に満ちてどこかポップでキッチュな世界は、まさに私たちの時代の絵画だと思われまう。(三野博司)



第 65 回 奈良日仏シネクラブ例会『恋ひとすじに』(3/2)

アラン・ドロンの追悼特集の第 1 回目として、一般的にはあまり知られていない『恋ひとすじに』(1958) をとりあげました。当時かけ出しの若手俳優にすぎなかったドロンが、西ドイツのスター女優ロミー・シュナイダーと共演し、二人が熱愛の末に婚約するきっかけになった作品です。この後ドロンは『太陽がいっぱい』(1960) の成功で、世界の観客を魅了する映画スターになっていきます。それまでのフランスのスター俳優ジェラルド・フィリップが 36 歳の若さで 1959 年亡くなったばかりでした。様々なめぐりあわせや運を味方につけ、スクリーン上で魅惑的な姿を見せ続けたドロン。参加者からは、それぞれの忘れがたい作品についての、熱い語りが聞かれました。(浅井直子)

アラン・ドロンとは同世代で、同時代に作品を観てきました。映画でも私生活でも、派手な女性関係でよく話題になっていて、私自身はあまり好きなタイプではなかったかもしれませんが、魅力と存在感のある俳優でした。(山岸多賀子)

ロミーの母親マグダ・シュナイデル(西ドイツの女優)は、マックス・オフェルス監督のドイツ映画『恋愛三昧』(1935 年、原作は『恋ひとすじに』と同じ)で、ロミーと同じクリスチヌ役を演じており、ロミーには縁のある作品だ。

はじめに『恋ひとすじに』のストーリーを紹介しておこう。男爵夫人レナ(ミシューリーヌ・プレール)との不倫関係が重荷になってきていた少尉フランツ(アラン・ドロン)は、友人(ジャン・クロード・ブリアリ)と出かけた酒場で歌手志望のクリスチヌ(ロミー・シュナイダー)と出会い恋に落ちる。フランツは彼女との結婚を心に決めるが、男爵夫人との別れがうまくいかない。やっと互いに納得して精算できたところで夫の男爵に知られてしまい、決闘での決着を迫られる。銃の名手である男爵が相手では命はないと悟ったフランツはクリスチヌに会いに行くが、心配をかけないように真実は告げずに愛の言葉を捧げワルツを踊る。翌日フランツの死を知ったクリスチヌは、バルコニーから身を投げた。

本作を観ながら、ロミー・シュナイダーとアラン・ドロン、そして二人の師となったルキノ・ヴィスコンティのこと、とりわけヴィスコンティの作品『夏の嵐』(1954) が想起された。『夏の嵐』の原作はイタリアの作家カミッロ・ボイトの『官能』で、『恋ひとすじに』の原作はウィーン出身のシュニッツラーの『恋愛三昧』だから、両者は直接には関係ない。しかし『夏の嵐』には、ロミー・シュナイダーが演じたクリスチヌのような可憐な娘との恋愛はないけれど、19 世紀のイタリアとオーストリア、その戦乱の時代を背景に、クラシック音楽や劇場での上演場面、舞踏会でのダンスシーンを物語に盛り込んで、軍服のオーストリア青年将校フランツ(ファーマー・グレンジャー)と美貌の侯爵夫人(アリダ・ヴァリ)を主人公に、年齢差と身分の違う成就するはずのない不倫の恋愛が取り上げられている。『恋ひとすじに』と『夏の嵐』の二つの映画の類似を感じずにはいられない。

しかも偶然にもアラン・ドロンとファーマー・グレンジャーは、劇中では二人ともフランツなのだ。背景の社会情勢から主人公たちの恋愛を描写する究極のリアリズムと演劇やオペラ等の音楽劇の要素を融合させて、ヴィスコンティ独自の映画様式を確立し、ステレオ・タイプのメロドラマを超越した『夏の嵐』に対して、『恋ひとすじに』はヴィスコンティ演出の細部にわたるリアリティや美的エレガンスには及ばない。とはいえ、後にアラン・ドロンとロミー・シュナイダーが、ヴィスコンティに寵愛されていくことの必然が、この映画の出演に端を発しているように思われてならない。そんなことから、若い二人の無限の可能性を秘めた未来を内包していたこの映画を、追悼上映の現在から振り返ると、とても愛しく感じる。ドロンにとっては、『若者のすべて』(1960) 『山猫』(1963) に繋がる端緒になった作品かなと、今回初めて鑑賞して思った。(吉村公彰)



第 66 回シネクラブ例会「アラン・ドロン追悼②『冒険者たち』」

1994 年の奈良日仏協会創立時に奈良シネクラブの責任者だった橋本克己さん(字幕翻訳家)が、1995 年 3 月の例会で紹介した作品『冒険者たち』を、30 年の月日を経て、あらためて紹介していただきます。お楽しみに！

❖日時: 6 月 29 日(日) 13:30~17:00 ❖会場: 奈良市西部公民館 5 階視聴覚室

❖プログラム: 『冒険者たち』(Les Aventuriers, 1967) ❖監督: ロベール・アンリコ ❖参加費: 会員 200 円、一般 300 円

❖問合せ: Nasai206@gmail.jp tel:070-1731-0230 (浅井) ❖予約不要

❖プレゼンターからのメッセージ: 『冒険者たち』は 60 年代後半から 70 年代に青春を送った多くの人にとって思い入れの強い作品だろう。そして映画を気に入った人の多くは、あの要塞島 Fort Boyard に行きたいと思うだろう。僕もその一人で 1986 年に行ったが、運悪く悪天候で観光船が欠航し行けなかった。2000 年に再訪し、やっと近くから見る事が出来た。観光船は要塞に行く前にエクス島 Les îles d'Aix に立ち寄り、1 時間近い自由時間があつた。当時はネットで情報が得られる時代ではなく、この島のことも何も知らなかった。映画を見た記憶だけで似ているなとマヌー(ドロン) が小舟に乗った場所を写真に撮り、歩いていて面白い日時計があり写真を撮ったが、ビデオを見直すと、まさにその家がマヌーが滞在した家だった。映画に出てくるアフリカ美術館も同じ島だと後から知り、再訪することがあれば絶対行こうと思っている。(橋本克己)



第 156 回フランス・アラカルト「あなたの知らない農業大国フランス」(5/25)

5月25日(日)、第156回フランス・アラカルトを生駒セイセイビルにおいて開催しました。参加者は18名。講師にお招きしたのは、福井日仏協会前会長、福井県立大学生物資源学部名誉教授の大城閑さんです。昨年の創立30周年記念祝賀会において、有志によるフォーレ『ラシーヌ讃歌』の合唱を披露したとき、夏の練習から当日まで、懇切な指導をしていただいたのが、大城さんと私たちの出会いでしたが、今回はフランス歌曲ではなく、本来のご専門であるフランスの農業の話をお聞きしました。自身の撮影による色鮮やかな多くの写真、みずから日本語訳字幕を付けたフランスの動画、グラフで示されたわかりやすいデータ、至れり尽くせりの内容が、深い学識に裏打ちされた一流の研究者により紹介されて、たいへん充実した講演会になりました。遠方から奈良までお越しいただいた大城さんに、あらためてお礼申し上げます。(三野博司)

◆入会して以来、フランス農業についての話を聞くのは初めてでした。漠然と、ワインとかチーズのお話かと思ってたら、唾然としたことに、話題は多岐にわたり、フランスの田園風景にはじまり、農地面積や農業人口、食糧自給率のデータ、フランスの一般人と農業従事者の農業に対するイメージアンケート結果、農業の歴史に貢献した人、今日の農業問題(高齢化、気候変動、農家の抗議運動、有機農業)など、それも日本との比較をしながら、頭が破裂するほどの充実した内容。暗澹としたのは、日仏ともに直面している農業の担い手減少の問題。とくに日本は農業に対するイメージが悪く、幼児教育からやり直さないと大変なことになるとの話。心が痛みました(杉谷健治)。



◆食料生産において、フランスはヨーロッパ諸国の中でも非常に恵まれた条件下にあります。地域ごとの自然の恵みと代々続く営農努力が作り出した農地風景の広大さ・美しさから、この国が農業大国であることは自明ですが、その内実はよく知りませんでした。伺ったお話からは、農業従事者の収入はさほど高くなく、特に年金が給与所得者と比べ不利とのこと。にもかかわらず、就労希望分野として上から4位と人気が高いのは、農業に働き甲斐を見出せるから、あるいは、食料を作ることが生きる喜びに直結しているからなのでしょう。糧を得る、gagner son pain と言うように、食料の獲得が生きることの基本であることは古今東西変わりません。一方、気候変動がフランス農業にとってもリスクであることを事例で理解しました。強力な温室効果ガスのメタンを牛が排出すること、気温の上昇で葡萄の生育に悪影響が出ていること等です。ともあれ、食料自給率の高さにフランスの底力と豊かさを再認識した次第です。(濱 恵介)



◆昨年の貴協会創立30周年記念祝賀会で、合唱をご一緒させて頂いたご縁で、三野会長から「フランス・アラカルト」で講演する機会を頂戴しました。内容は自由にと言うことでしたが、やはり現役中は農業、特に園芸学と植物生理学が専門だったのでフランスの農業についてお話しすることにしました。当日は多くの方々にお集まり頂き、特に一緒に合唱を歌った方々とも再会できうれしかったです。内容的にはちょっと欲張りすぎて、駆け足になってしまった部分がありました。皆さんはもちろんフランスが農業国であることはご存じだと思いますが、私の今回の話で植物科学の発展に寄与したフランス人のことや、フランス農業の実態と問題点についてさらに興味を持っていただけたのなら望外の喜びです。今回、このような機会を頂いたことには会長様他、役員の皆様に感謝いたします。(大城 閑)



法人会員紹介

「株式会社 NARAFRANCE」

<https://www.narafrance.com/>

★2020年5月に、奈良県生駒市に日仏通訳・翻訳、日仏ビジネスサポートの会社、株式会社 NARAFRANCE を起業。17年間勤めていた在日フランス大使館での経験を活かし、現在では行政やフード関係

(アラン・デュカス、ラ・メゾン・デュ・ショコラ)、大阪・関西万博のフランス語圏ナショナルデーの通訳として活躍中。関西に来日するフランス語圏の企業や団体の商談や会議通訳のご要望ありましたらぜひご連絡ください。

★2025年4月より母校明治大学経営学部の兼任講師として履修学生150名の比較経営論(西欧)を担当(左下写真)。フランス企業についての経営学の内容はもちろん、今週の仕事として通訳の仕事内容も紹介しています。また信州大学、奈良女子大学で特別講義も実施。月に一度、学園前と西大寺の近鉄不動産「住まいと暮らしのぷらっとHOME」でフランス語講座を開講中。

★日仏通訳のモットーは、「笑い」のタイミングまで通訳すること。フランス大使館時代フランス人上司が一字一句機械のように正確に訳す通訳に対して「あの通訳はこの会議のリズムとムードを壊している。通訳は会議を盛り上げるムードメーカーだ」と

の意見を聞いてから、話者のテンションを伝える通訳を心がけています。これが正しい通訳方法かどうかは別として、対話を楽しむフランス人にとっては重要なポイントだと信じています。

※本誌7頁の「大阪・関西万博 フランスパビリオン体験記」の記事もぜひお読みになってください、(編集部)

連絡先: kaoruko.hayashi@narafrance.com

所在地: 奈良県生駒市

代表: 林薫子(はやし かおるこ)

写真: 2025年4月万博フランス館前にて

ワインショップ「サン・ヴァンサン」

<https://wineshop-saintvincent.com/>

★サン・ヴァンサンでは、フランスワインを中心に、イタリア・アメリカ・スペイン・オーストラリア・南アフリカ・ドイツ・ニュージーランドなど、世界中の飲み頃ワインをご用意しております。お手頃で良心的な価格の美味しいワインを、店内にたくさんとり揃えております。

★ご希望のお客様にはソムリエの資格を持った店主が、お客様に寄り添ったお好みのワインをご提案いたしますので、是非、お気軽にご来店ください。

★今回はおすすめとして、アルザスの白ワイン「ヒューゲル ジョンティ 2022年」を紹介させていただきます。「ヒューゲル ジョンティ」の名は、昔のアルザスの高貴品種の組合せからつくられたワインを「ジョンティ」と呼んでいたという伝統を復活させたもので、アルザスの人びとが日常的に飲んでいるワインとのことです。

◆ ワイン名 : ヒューゲル ジョンティ 2022年

◆ 産地 : アルザス地方

◆ ブドウ品種 : ゲヴルツトラミナー、
ピノ・グリ、リースリング、ミュスカ、
シルヴァーナ

◆ 希望小売価格: 2,600円(税抜き)

◆ 特別価格 : 1,900円(税抜き)

住所: 奈良市学園朝日町2-2 米田ビル102

電話: 0742-43-3832

定休日: 毎週月曜、第2・第3火曜

営業時間: 11:00~19:00

店長: 竹中宣人(たけなか のりひと)



※法人会員「菜宴」の紹介は、10月号に掲載予定です。

随想「パリ病院学派の主導者ビシャ」

角田 茂(つのだ しげる)

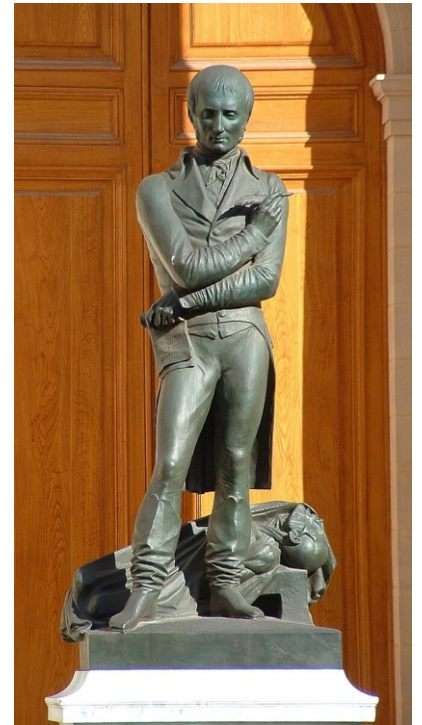
パリ 6 区、サン・ジェルマン通りに、メトロの駅オデオンがある。その名称の由来は、1782 年に王立劇団コメディ・フランセーズの芝居小屋として開設され、革命後、オデオン座と名前を変えた劇場による。オデオン駅で下車して、南東へ数分歩くと、パリ第 5 大学（ルネ・デカルト大学）医学部校舎がある。中庭玄関前には、ビシャのブロンズ像（ダヴィッド・ダンジェ作）が立っている。ビシャ（Marie François Xavier Bichat: 1771-1802）は、パリ病院学派（アッカークネヒト提唱：後述）の主導者であり、パリ衛生学校（1794 年に開講した、パリ大学医学部の前身）の第 1 期生である。オデオン駅界隈には、古本屋を含めて医学書を専門とする本屋が立ち並び、私はこの辺をよく散策したものである。サン・ジェルマン・デ・プレ教会でのコンサートが始まる前、時間つぶしに、ぶらつくこともあった。

フランス革命後、収容所としての病院は解放され、市民のための病院へと変わった。この改革に貢献し、「精神病患者を鉄鎖から解放した医師」として有名なピネル（Philippe Pinel: 1745-1826）は、患者一人ひとりの症状を詳しく観察・記録し、その患者が亡くなった後、病理解剖をするというパリ病院学派の方法論的基礎を築き、それを発展させたのがビシャである。このような流れの中で、1861 年、ブローカにより運動性言語中枢が発見され、同年、メニエールにより、めまい・耳鳴・難聴の発作原因が三半規管・蝸牛の病変によることが発見された。ブローカ中枢の発見やメニエール病の発見は、パリ病院学派の功績である。

医学史家アッカークネヒト（Erwin Heinz Ackerknecht, 1906-1988）は著書『パリ病院：1794-1848（Medicine at the Paris Hospital: 1794-1848）』の中で、19 世紀前半において医学の進歩に貢献したのはパリの『病院の医学』であり、19 世紀後半において医学の進歩に貢献したのはドイツの『研究室の医学』であると述べている。前者において寄与した医学者は、ピネルとビシャであり、後者においてはフィルヒョウとコッホとのことである。

我々の体内では、細胞が集まって組織を作り、組織が集まって器官を作っている。病理学の進歩とともに、病気の座は、器官から組織、組織から細胞へと移った。世界で初めて系統的な病理解剖を始めたのは、パドヴァ大学教授のモルガーニ（Giovanni Battista Morgagni: 1682-1771）で、1761 年に『解剖によって明らかにされた疾病の座および原因（De sedibus et causis morborum per anatomen indagatis）』を出版し、私は彼を器官病理学の父と呼んでいる。パリ病院学派の主導者であるビシャは、組織病変に注目して、1801 年に『生理学と医学に応用した一般解剖学（Anatomie générale appliquée à la physiologie et à la médecine）』を出版し、私は彼を組織病理学の父と呼んでいる。粘膜組織の炎症という同じ病変でも、気管支では咳や痰が発症し、大腸では腹痛や下痢が発症することを解明した。この場合、もし病因が一つであれば、治療法も一つで良いことになる。ベルリン大学教授フィルヒョウ（Rudolf Ludwig Karl Virchow: 1821-1902）は、顕微鏡、生体染色、ミクロトームという先端技術を用いた研究を通して、1858 年に『細胞病理学（Die Cellularpathologie）』を出版している。彼は細胞病理学の父であると同時に、近代病理学の父でもある。白血病や癌の研究はこの頃から始まっている。近年、脳腫瘍を含む癌の診断において、遺伝子解析の結果が必要となりつつある。このことは、まさに分子病理学の時代に入ったことになる。

※追記：2019 年にパリ第 5 大学と第 7 大学が合併するなど、パリ大学の大規模な再編が行われた。この文章の中に出てくる大学名は、約 40 年前、私が留学していた当時のものである。



パリ第 5 大学医学部正面玄関前
にあるビシャ像

奈良でのひととき：古き着物と月日亭の宿

コリーン・アギーレ

Une parenthèse à Nara : entre kimonos anciens et nuit au ryokan

À Nara, le temps ralentit. Entre les bruits feutrés des pas sur la mousse et les appels lointains des daims, on découvre une ville qui chuchote à ceux qui savent écouter.

Au détour d'une ruelle, des boutiques de kimonos de seconde main dévoilent leurs trésors. Chaque pièce raconte une histoire : les motifs discrets d'un *komon*, la douceur rustique d'un *tsumugi*, ou l'élégance d'un *houmongi* prêt à revivre. Le choix d'un kimono n'est jamais anodin – c'est un instant suspendu entre passé et présent.

Quand le jour décline, un sentier monte doucement vers la forêt de Kasuga Taisha. Là, à l'abri des arbres anciens, se trouve Tsukihitei, un *ryokan* niché dans le silence.

Ici, tout est calme, subtilité et présence. Les plats servis au dîner sont de véritables poèmes saisonniers. La lumière des lampes frôle les murs de terre. Et la nuit, lovée sous les futons, on entend peut-être le pas discret d'un cerf, comme une légende que seul Nara connaît.

(Coline Aguirre)

奈良では、時間がゆっくりと流れます。苔の上を歩く音、遠くで聞こえる鹿の声。耳を澄ませば、街がそっと語りかけてきます。小道の先にある古着の着物屋には、時を超えた美しさが眠っています。小紋の控えめな模様、紬の温もり、訪問着の静かな気品。一枚の着物との出会いは、過去と今を結ぶささやかな奇跡です。

夕暮れ時、春日大社の森を抜けると、月日亭という静かな宿が現れます。土壁に灯るあかり、季節を映す料理、静けさに包まれた夜。布団にくるまりながら、どこかで鹿が通り過ぎる気配に耳を澄ます— それは、奈良だけが語れる物語かもしれません。



コリーンさんは、昨年7月に当協会に入会してくださいました。会員有志のみなさんのなかには、コリーンさんの修復中の古民家の見学に訪れたり、不要になった着物を届けたりするなどして、直接に交流されている方もおられると思います。コリーンさんに編集者からの質問に、日本語で答えていただきました。(編集部)

1. 好きな日本食は？ — うどんが大好きです！ それから、あんこを使った和菓子もとても好きです。やさしい甘さが心をほっとさせてくれます。
2. 日本酒は好きですか？ — 私はお酒を飲まないのですが、日本酒の文化や造り方にはとても興味があります。
3. 着物以外で興味のある日本文化は？ — 私は日本の建築が大好きで、伝統的な家や町並みにとても魅力を感じています。また、陶芸や刀鍛冶、木工などの手仕事・職人の世界にも強く惹かれています。さらに、日本の歴史、とくに航空機や自動車の発展に関する話もとても面白いと感じています。

大阪・関西万博 フランスパビリオン体験記

林 薫子 (はやし かおるこ)

2025 年 4 月 17 日に大阪・関西万博のフランスパビリオンを初訪問してきました。

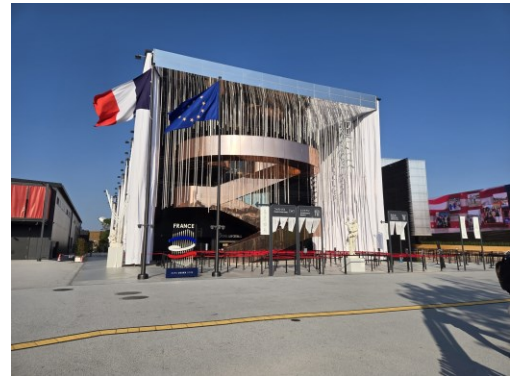
思えば、約 2 年前の 2023 年 5 月に大阪市内の万博協会で開催されたフランスパビリオン出展調印式に通訳として参加して以来、フランスパビリオンに注目してきました。この出展調印式では、他の参加国がパビリオン完成予定図などを提示するなか、フランスはビジュアル資料一切なし「テーマは愛（アムール）です」のトークのみで押し通しました。しかし、フランスパビリオン政府代表ジャック・メール氏の「環境や自然や家族、人類への愛」という堂々たる演説に取材陣が静まりかえったことを今でもよく覚えております。そして、万博開幕直前にはフランスパビリオンの完成が遅れているという噂をたびたび耳にしましたが、万博開幕当日にフランスパビリオンも盛大にオープニングセレモニーを開催したようです。

そして当方が初訪問したのは 4 月 17 日（木）。パビリオン内で開催された日仏フードテックセミナーに参加するためでした。パビリオンで一般公開されるのはいわゆる「展示室」のみですが、おそらく各国パビリオン内には VIP や特別招待者のためのパーティーやセミナー、商談ルームを設けてあり、フランスパビリオンにも 4 階にセミナールームがあり、普段はビストロとして使われている場所もセミナー専用のレセプションルームとなりました。

フランスパビリオンの展示室は、今回の出展スポンサーである LVMH のルイ・ヴィトンのトランクや、クリスチャン・ディオールのジャケットやドレスのトルソーなどが飾られており、来場者やメディアからは「ブランドのショールーム」みたいと揶揄されておりますが、それこそがフランスの伝統と文化とイノベーションといわんばかりのとてもわかりやすい、説明員やコンパニオン不要の展示内容となっています。

おそらく今後も 4 階のセミナールームで開催が予定されている特別招待者のためのフランスのテクノロジーや、ヘルスケア、ライフスタイルの展示商談会こそがフランスの最新のイノベーションを体感できる場なのでしょう。そういった一般ビジターと特別招待客の違いというのもフランスらしいと思います。

なお当方が参加した日仏フードテックセミナーは、日本とフランスの発酵食品のコラボレーションとテクノロジーがテーマで、セミナーの合間には、フランスの発酵食品であるブルゴーニュワインやコンテチーズといった名産品がならぶ素晴らしい昼食会が開催されました。セミナー会場はもちろん、この昼食会で日仏の関係者の会話が盛り上がり、そしてネットワークが広がるというまさにフランス風おもてなしにあふれた素晴らしいセミナーでした。



※写真は上から、1) フランスパビリオン正面から 2) ルイ・ヴィトンのトランクルームとロダンの彫刻を説明するジャック・メール フランスパビリオン政府代表 3) 日仏フードテックセミナーで日本からは熊本県知事とくまモンが登場。

私とフランスとの出会い

木内 成人（きうち しげと）

私が初めてフランスの地を踏んだのは1999年の6月でした。オランダ出張からの帰途「フランスのリヨンにある現地子会社に寄って来い」と上司からの指示があつてのことでした。当時の仕事上では全く関係の無い事業部の子会社になぜ表敬訪問するのか、わからないままアムステルダムスキポール空港からパリ経由でリヨン・サトラス空港（現サンテジュペリ空港）に到着したのが第一歩でした。

帰国後は平穏な日常を過ごしていた私にとって、人生を変える一大転機が発生したのは6ヶ月後の12月でした。「2000年4月1日をもってLyon現地法人のエグゼクティブマネージャーを命ずる」との内示が突如発せられたのでした。まさか46歳での初めての海外駐在、しかも家族帯同でとの指示でした。6カ月前の表敬訪問が、実は顔見世品定めであったことが判明した次第でした。

かくして、妻と高1と小6の娘2人に小4の息子を連れ一家5人でリヨンに赴任しました。仕事で使う英語の実力も拙い上に、フランス語については一家揃って全くの初体験で、日常生活や学校生活では最初の6カ月間は苦勞と失敗の連続でした。子供達は現地の公立インターナショナルスクールに入ったので、フランス語での授業が殆どで地獄の毎日だったと今でも言っています。特に息子は日本でローマ字も習っていない状態でいきなりフランス語のアルファベに触れて、日常の宿題の意味も全く分からず、妻と二人で辞書を引きながら二人三脚でした。言葉が分からないのが如何に苦しいか一家揃って体験しましたが、一方で思春期や反抗期などと言っている余裕もなく家族の絆が深まったのもこの時期でした。いまだにファミリーの団結が強いのはこの苦勞お陰だと思っています。

6年半を過ごしたリヨン駐在は、フランス文化と精神的価値観を理解する能力を私たち家族に与えてくれました。2006年、次女が日本帰国直後に応募したJALエッセイコンテストで、「あっちの匂いとこっちの匂い」が銀賞を受けました。「旅客機のハッチが開いて一歩踏み出て一呼吸すると、二つの文化と価値観の切替わりを匂いで感じる」と記述したリアル体験の表現に審査員の方々が称賛されました。またインターナショナル校の日本セクション長の先生が卒業生に、「あなた達はコスモポリタン（地球人）であることを忘れないで、様々な国の文化と価値を理解してこれからも生活してください」と話されたのも深く心に残っています。

リヨンは、永井荷風著の「ふらんす物語」にも登場する日本人にもゆかりある街で、絹織物と化学産業で栄えた歴史ある地域ですが、我が家にとっても第二の故郷と言っても過言ではない重要な場所です。

その後、私と妻は2度目のフランス滞在の機会に恵まれました。2010年6月から2012年8月までアルザス地方のコルマルに赴任しました。米国の機械部品メーカーの欧州部門の買収が決まり、一人駐在の日本人でフランス・ドイツ・チェコ・スペイン事業の統括責任者というのが私に与えられた役割でした。今回は英語力も上達し、フランス語もリヨン時代のお陰で、私も妻も日常会話程度を操れるようになっていたので、フランスの日常生活を楽しむことが出来ました。

コルマルはフランス北東部のストラスブールから車で1時間位南下したところにある、木組み（コロンバージュ）の家が立ち並ぶ中世から続くとても美しい街です。アルザス・ワイン街道の真ん中に位置しています。最寄りの空港はバーゼル・ミュールーズ・フライブルク空港で、スイス・フランス・ドイツの3か国に跨った空港です。ここから全ヨーロッパに出張しました。また、ドイツとの国境も近くライン川を渡ればフライブルク旧市街にも40分位で行けるので、フランスとは異なるドイツ文化に触れることが出来ました。

このようにフランス滞在歴が通算10年弱に及びますので、フランス愛はとても強いと自負しています。2016年からは、コロナ禍の2年間を除いて毎年フランス旅行を行っています。最近ではパリにアパートマンを借りて拠点とし、そこからフランス国内旅行をするのが定着しています。昨年はマレ地区のボージュ広場、一昨年はサンジェルマンデプレ教会の向かいに仮の居を構えました。また2022年より、フランス語とフランス文化を楽しむサークル活動を大阪市内で行っています。フランス大好き人間として「フランス推し活」をライフワークにしたいと思っている今日この頃です。（写真：左からリヨン旧市街、リヨン ベルクール広場、コルマル旧市街）



ストラスブールより、日本への愛をこめて

デルフィーヌ&ファビアン・リブスト

Nous sommes Delphine et Fabien, nous tenons un magasin d'alcool à Strasbourg. Depuis très longtemps, nous sommes passionnés par l'art et la culture japonaise, et nous organisons régulièrement des dégustations de saké et liqueurs japonais.

En 2015, nous avons visité Tokyo, Kyoto et Nara. Lors de notre séjour à Nara, notre attention s'était portée sur les temples bouddhistes de Kôfuku-ji et Tôdai-ji, bien sûr nous sommes également allés voir les cerfs dans le parc.

Ce n'est qu'en 2016 que nous avons rencontré nos amis de cœur, Yukiko et Koji Chinen. Cette rencontre nous a encouragé encore plus à visiter le Japon et surtout à découvrir les habitants.

L'an dernier, notre voyage s'est porté sur Hiroshima, Kobe et Arima Onsen, cela nous a permis de goûter de nouveaux sakés et le célèbre bœuf de Kobe, mais surtout de revoir nos amis Japonais, Yukiko et Koji, qui nous ont emmené visiter deux brasseries de saké, Hakutsuru et Fukuju.

Ces deux visites étaient très instructives sur la productivité et la rigueur des Japonais dans le travail. Tout au long de notre séjour, nous avons retenu le sens de l'hospitalité et la gentillesse des habitants. Grâce à Yukiko et Koji, nous avons pu mesurer la diversité de la gastronomie japonaise. Comme en France, chaque région possède plusieurs spécialités culinaires.

L'année prochaine, au mois de Mars, nous irons à nouveau rendre visite à nos amis Japonais avant d'aller refaire une visite plus détaillée de Nara. Cette année, la ville de Nara doit être très occupée par la proximité de l'Exposition Universelle à Osaka.

À Strasbourg, chaque semaine, nous prenons des cours de langue japonaise afin de mieux comprendre la culture et aller encore plus loin.

(Riboust Delphine & Fabien)

ストラスブールで酒屋を営むデルフィーヌとファビアンです。私たちは長年日本の芸術と文化に情熱を注いでおり、お店では定期的に日本の酒とリキュールの試飲会を開催しています。

2015年には東京、京都、奈良を訪れました。奈良滞在中は興福寺や東大寺といった仏教寺院に魅了され、奈良公園の鹿も見に行きました。

2016年に、心の友となった知念夕紀子・宏司さん夫妻に出会いました。この出会いが私たちを日本へ、そして地元の人々と交流したいという思いへと駆り立てました。

昨年の旅では、広島、神戸、そして有馬温泉を訪れ、新酒や有名な神戸牛を味わうことができ、さらには日本の友人である夕紀子さんと宏司さんと再会できたことが何よりでした。二人は私たちを「白鶴」と「福寿」の二つの酒蔵に連れて行ってくれました。

この二つの訪問は、日本人の仕事における生産性と勤勉さについて学ぶ機会となりました。滞在している間に、おもてなしの意味と人々の親切さが心に刻まれました。夕紀子さんと宏司さんのおかげで、日本の食文化の多様性を実感することができました。フランスと同じように、それぞれの地域に様々な名物料理があります。

来年3月、再び日本の友人たちに会い行き、その後でより細かに奈良を観光する予定です。今年は大阪万博が近いこともあり、奈良の町は大変にぎわっていることでしょう。

私たちはストラスブールで毎週日本語クラスを受講し、日本の文化をもっとよく理解して深めようとしています。

※この記事を投稿するにあたってファビアンさん自ら日本語作文に取り組んでくださいました。なお、Mon Nara 2025年2月号の5頁に掲載されています、当協会会員の知念宏司さんによる「在外研究がつかない不思議な縁」の記事もぜひ合わせてお読みになってください。昨年秋のリブスト夫妻との交流がより詳細に語られています。(編集部)



『史記』の翻訳者 エドゥアール・シャヴァンヌ

白鳥保二（しらとり やすじ）

司馬遷の『史記』の一部を高校の漢文の授業で習って以来、その面白さにひかれ日本語全訳を読むようになりました。故事成語の由来になっている様々な出来事が書かれています。それだけでなく、物語的な部分もあり、古代中国の歴史についての司馬遷の生きた時代の認識と司馬遷個人の批評も述べられています。

『史記』は日本人にとっては古来、平安時代から江戸時代に至るまで基礎的な教養の書でした。紫式部が、父が弟に教授していた史記を傍らで聞いて覚えたという逸話も有名です。しかし、史記の中の記述などをまさに教養として知っているということ以外に、歴史書としての史記について考察しているものは、江戸時代まではあまりないように思われます。歴史についての考察、歴史学というものが、近代以後の考え方と異なり、訓詁学的なものだったからでしょうか。

マルコポーロの東方見聞録以後、ヨーロッパでも中国についての関心が深まり、明・清時代には、多くの宣教師たちが中国に滞在し、記録を残しています。儒教や孔子の考え方も伝わりました。ただし、ギリシャ・ローマの伝統の上に成り立つ西洋社会は、単に珍奇なものとしての中国趣味的なものの受容にとどまった感があり、18世紀啓蒙主義時代、ヴォルテール、ディドロ、モンテスキューなどは、偏った中国観を示しています。大航海時代から、植民地経営、そして帝国主義に至るヨーロッパ優位の考え方が当たり前になってきます。19世紀はヨーロッパで歴史学が盛んになり、コント、テーヌ、ヘーゲルなどが歴史を論じます。

そのような19世紀の歴史学において、フランスは東洋学、中国学において、他国を圧倒する存在でした。幾多の碩学があらわれます。エドゥアール・シャヴァンヌ (Édouard Chavannes, 1865~1918) はその一人で、フランス中国史学の祖とも言われています。

シャヴァンヌは1865年リヨン生まれ。1885年エコール・ノルマル・シュペリウール (ENS) に進み、哲学教授資格を得たのち、中国哲学を研究しようとしたが、中国史研究の道に進みます。当時、中国史の研究はフランスだけでなく、ヨーロッパ全体でもほとんど行われていませんでした。

1889年、シャヴァンヌはフランス公使館員として北京に赴き、2年の滞在中に『史記』の研究・翻訳にとりかかり、“Les Mémoires historiques de Se-ma Ts'ien” (司馬遷の史記, 1895-1905) が公刊されました。

彼は実証主義的な考察のもとに史記の内容、著述形態、歴史書としての史記の特徴、その価値などを述べ、ヘロドトスやリヴィウスといったヨーロッパ古代の歴史家との比較を行い、史記はそれ以前の中国の史書や伝承などを、矛盾することも含めて網羅的に記述することによって、現代的な意味での歴史研究の材料を提供していると考えました。歴史上の出来事を恣意的にならずに考察することが大切であると、シャヴァンヌはこの史記研究で訴えています。しかしながら次のようにも述べています。「司馬遷は使用した文書の価値を論ずることはしていない。確実さと誤りとの中間にあり、普通史家が唯一の標準としている蓋然性を司馬遷は無視しているように見える。司馬遷は自ら正しいと考えた証拠だけを引き、自ら過ちと考えたものは無言のうちに葬っている」。(高田時雄編著『東洋学の系譜 欧米編』, 大修館書店, 1996年, 107頁)

日本では明治時代以後、多くの『史記』研究がおこなわれています。シャヴァンヌが最後に中国に滞在した1907年、京都大学の桑原隲蔵 (1871-1931, 桑原武夫の父) らと会ったという話もあり、日本の東洋史学者とどのような話がされたのかも興味深いところです。

シャヴァンヌはフランスに帰国後、中国の古代の宗教儀礼 (『泰山』東洋文庫)、漢代画像石の研究、敦煌文書の解説、コレージュ・ド・フランスでの講義などに力を注ぎ、『史記』の翻訳は中断され、日本人にもっとも興味のある「列伝」は翻訳されていません。もしもその翻訳がなされ、プルタルコス「対比列伝」と比較されていたら…と思わずにはいられません。彼は1918年52歳という若さで亡くなりました。弟子にはアンリ・マスペロやマルセル・グラネがいます。

さて、Wikipédia フランス語版に和服を着たシャヴァンヌ夫妻の写真が掲載されていました。「シャヴァンヌと妻アリス・ドール、日本旅行中、1892年頃」とのキャプションが付されています。1892年はアリス・ドールとの結婚の翌年です。中国に再渡航する前に、夫婦で日本に立ち寄ったのでしょうか？ 詳細はわかりませんが、興味のある話です。



『美女と野獣』（La Belle et la Bête）—童話の源泉と映像の魅力—

菌田章恵（そのだ あきえ）

最近、ディズニー映画や絵本で有名な『美女と野獣』を文庫本で読む機会があった。作者はボーモン夫人（1711～1780）で、1756年に出版されている。子供向けのお話によくある「むかし、とても裕福な商人がありました」で始まる。娘のベルは父親を救うために宮殿にいる獣に会いに行く。獣の求婚を断り続けるうちに、彼の外見や知性ではなく美德に触れ、最後は受け入れる。すると邪悪な妖精に呪いをかけられていた獣はハンサムな王子様に戻り、「二人は末永く幸せに暮らしました」で終わる。

この童話の源泉には1740年にヴィルヌーヴ夫人（1685～1755）によって書かれた『美女と野獣』という同名の小説があり、こちらも読んでみた。2部から成る1部では、ベルはおぞましい外見の鈍重な獣を夫にする決心がつかないが、2部の前半で感謝の気持ちから求婚を受け入れると、獣はハンサムな王子様に戻る。しかしここですんなりと二人が結婚できるわけではなく、王子の母である女王が、商人の娘であるベルとの身分の違いから反対する。後から、実はベルははるかに身分の高い妖精の娘であることが分かり、二人は結ばれる。しかしまだ物語は終わらない。こんどは獣自身が語り手になり、今に至った背景が明かされる。育ててくれた年老いた妖精からの求愛を断ったことで、王子は獣にされ、知性も使ってはいけなくと手かせ足かせを強いられていたことがわかる。さらに物語は続く。入れ子のように、語り手が妖精にかわり、妖精の掟、力関係などの内部事情が明かされる。

ヴィルヌーヴ夫人の『美女と野獣』では、結局ベルは、獣の外見の醜さを克服したわけではなく、感謝の気持ちから求婚を受け入れている。ベルは自分の感情に正直であり、現実的だ。王子が異形に変えられるというのはフィクションだが、姑の反対、ベルの本心など、人間の普遍的な真実も描かれている。美談には収まらない話の面白さがある。他の童話も、様々な源泉と読み比べてみると、意外な発見や共感があるかもしれない。

さて、このお話を映画化するとどうなるのだろうか？ 映画はエンターテインメント性が高く、しばしば監督自身の解釈や変更が行われる。『美女と野獣』を初めて実写映画化したのは芸術家ジャン・コクトー（1889～1963）。彼は第二次大戦の戦禍で荒廃していたフランス人の心を癒す「大人のためのお伽噺」として、1946年にこの映画を作った。モノクロだがとても印象深い。物語の設定は、ベルには兄が1人と姉が2人おり、兄の友人アヴナンがベルのことを慕っている。ベルの父親の仕事上の不運と、獣との出会いは原作と同じである。本筋はあまり変わらないが、強い印象を受けたのは演出である。二つ挙げてみよう。

一つ目は小道具で、獣の住む城の燭台を持つのは、人の手であり、マントルピースの飾りは人の顔である。ワインを注いでくれるのも人の手である。王子は獣に、そして家来たちは物に変えられたことが分かる。ベルはその奇妙さには気づいていないように見えるが、観客の私たちには、流れてくるホラー映画のような音楽から、そのことが伝わってくる。

二つ目は、原作にはないが、獣の城にある財宝が収められているディアナの神殿のシーンである。兄と友人のアヴナンは、獣をやっつけてベルを救うため弓矢をもって城へ向かう。獣をやっつける前に、欲に眼が眩んで、ディアナの神殿に屋根から忍び込んで盗もうとする。それを見たディアナの像が弓でアヴナンを射落とす。すると、アヴナンが獣になってしまった。そのあと獣だった王子が、ベルからの愛の告白により元の姿に戻るが、その顔はアヴナンそっくりである。この入れ替わりが、映画ならではの感じさせる。演じていたのは、ジャン・コクトーお気に入りの俳優ジャン・マレー。彼に三役（獣、アヴナン、王子）を演じさせるために、このシーンを加えたのだろうか…？ とも思った。



第157回フランス・アラカルト「フランス詩に泳ぐ魚たち」講演のご案内

- ❖日時：9月7日（土） 14:30～16:30
- ❖会場：生駒市コミュニティセンター 4F 401 号室
- ❖会費：会員 500 円、一般 1,000 円
- ❖問合せと申込先：sugitani@kcn.jp tel：090-6322-0672（杉谷）
- ❖講師：森田俊吾さん（奈良女子大学文学部言語文化学科専任講師）
- ❖森田さんからのメッセージ：フランスの詩で「魚」が登場する作品は思い浮かぶでしょうか？——詩の中の



動物といえば、「鳥」をイメージされる方のほうが多いかもしれません。たしかに詩人たちは、古来より鳥の鳴き声を自らの歌声と重ね合わせ、ときに飛翔の象徴として繰り返し描いてきました。ところが、特に 20 世紀以降の詩になると、「魚」が意外な頻度で登場してきます。ときに魚が歌い、空を飛ぶことも——。そんな突飛な「魚」たちが、なぜ現代詩の中で多く描かれるのでしょうか。本講演では、こうした魚の登場するフランスのいくつかの詩を、皆さんと一緒に声に出して味わってみたいと思います。前半では鳥との対比から、後半では旧約聖書『ヨナ書』との関連を手がかりに、その象徴的な意味を読み解いていきます。普段詩を読む人も、そうでない人も、ぜひ言葉の海を自由に泳いでみませんか。

《2025 年度第 2 回理事会報告》…事務局

日時：2025 年 5 月 15 日（木）15:00～16:00。場所：野菜ダイニング「菜宴」。
出席者：三野、浅井、高松、菌田、杉谷、中辻、喜多、藤村。議題 1. 会員数確認。議題 2. 3/27 理事会後の活動：(4/26)第 9 回美術クラブ例会「絹谷幸二 平和へ」。議題 3. 今後の行事：(5/25) 第 156 回フランス・アラカルト「農業大国フランス」、(6/29) 第 66 回シネクラブ例会「アラン・ドロンの追悼②『冒険者たち』」、(9/7) 第 157 回フランス・アラカルト：フランス詩、(11 月初旬) ガイドクラブ「聖林寺と安倍文殊院」、(10 月か 11 月) 秋の教養講座：講師西崎美也子会員。議題 4. Mon Nara 通信 No.21、Mon Nara No.308 6/16 発送予定。議題 5. その他：ホームページの修正。
次回理事会 7 月 17 日（木）15：00～16：30「菜宴」にて。



編集後記 ☆コロナ禍以前、フランスの田園地方をたびたび旅行していたある年の 5 月末頃、セーヌ・エ・マルヌ県の小村にある中世のロマネスク教会を訪ねるのに、鉄道駅から 2~3 km ほど歩かなければならなかったことがある。はじめは少し不安だったが歩きはじめると、野道には草花が咲き、周囲の森は鮮やかな緑におおわれ、心地よく散策することができた。途中、森と平地の境にある斜面に、白い花の咲いている灌木が何本か目に入った。明るい緑色の葉が茂るなかに白い小花が房をなしてふんわりと浮き上がるように咲いていて、やわらかな日射しを浴びて輝いているように見えた。写真に撮って調べてみると、《sureau》「西洋ニワトコ」の花だった。それまで本の中でしか知らなかった名前の植物に直に対面できたと思うと、嬉しくなった。☆西洋ニワトコは、古代からヨーロッパのさまざまな文化に取り入れられ、食用や薬用にされ、民間伝承の中で重要な位置を占めている。キリストの十字架はニワトコの木で作られたとか、魔女が変身した木とも云われている。その一方で、ニワトコには不思議な力があり、旅人や家の魔よけとして重宝されたり、魔法や占いに用いられる杖として、学びたいことがあるならニワトコの木を選ぶとよいとされる。現代では、『ハリー・ポッター』の小説シリーズで「ニワトコの杖」は魔法界最強の杖とされている。☆日本の「ニワトコ（接骨木）」は「山たづ」の呼び名で『万葉集』に詠まれており、やはり古くから親しまれているが、果実は赤い。黒い実をつけジャムやハーブティーに利用される「西洋ニワトコ」とは品種が異なるようだ。それでも、日本の山野で白い房状の花を咲かせているニワトコを見かけると、フランスの小道を散策した時の心地よさが蘇ってくる。(N. Asai)

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2025 年 10 月号は **9 月 30 日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさまで「**Mon Nara**」(2 月、6 月、10 月発行) 又は「**Mon Nara 通信**」(4 月、8 月、12 月発行) に**チラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2025 年 6 月号 numéro 308

奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741

〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司